内藤家資料（１）（２）（３）について

内藤家資料は二種類の文書群に分けられており、（１）に属する四百六十七点の文書群は、主として旧高遠藩主内藤家に伝えられ、当館所蔵となった物であり、（２）に属する百三十八点は、大正中頃、中村弥六氏を中心に高遠藩史編纂の計画があり、そのため広く関係者に呼び掛けて蒐集された資料を、主として高遠町の井口純一郎氏が筆写して、竪帳に纏めた物である。

内藤家と高遠町との係わりは、元禄四年（１６９１）内藤清枚公が高遠領三万三千石を拝領した時に始まり、明治四年（１８７１）の廃藩、其後更に高遠県も廃止され、知事を退官した内藤頼直公が高遠を去るまでの八代、およそ百八十年間に及んでいる。

内藤家は藤原秀郷等を祖とする名家といわれ、徳川家譜代の大名家であり、代々江戸城内では雁の間詰、江戸城各御門の警衛、火の番、奏者番等を勤めたが、中でも内藤重頼公は大阪城代、京都所司代、若年寄等を歴任し（高遠領知前)、又内藤頼寧公も天保年間頃若年寄に就任している。

内藤家資料（１）の中には所謂大名家文書といわれる任官に関する宣旨・位記・口宣案、代々の名付書、領地目録・領地朱印状、将軍への季節毎の進物に対する歴代将軍黒印入りの御内書、又藩主の代替わりに際して家中の藩士と領民へ触れ出される、藩主黒印入りの御添書等、見るからに立派な文書も多いが、内藤家の事蹟を纏めた「内藤十五世紀・二十三巻」「世乗・十五巻」其他諸藩士の勤仕の記録、分限帳、高遠藩の財政状況を示す数々の証文類等、近世の高遠藩を知る為の基礎的資料が揃っている。

又内藤重頼公京都勤役中に受取りの、幕府老中衆よりの諸連絡の書状武家伝奏千種・柳原両柳よりの朝廷諸事に関する諸連絡の書状、又江戸城西の丸において右大将様（将軍世子）付きであった頃の、西の丸の人事に関する諸調査書等、当時幕府の中枢に係わる資料であるだけに、貴重であり興味深いものである。

内藤家資料（２）の文書は、御達書から個人の家の記録まで、その種類は多岐に亙っており、藩史編纂のために必要とされる資料が選ばれて収録されつつある途中で、この計画が中止となった事は誠に残念なことではあるが、この文書群の中にも貴重な近世高遠藩の基礎的資料が多く丁寧に筆写されていて、誰にでも読みやすい物が多い。　　高遠町図書館　１９９３．８月

内藤家資料（３）は 1998 年 3 月に追加された六十八点の資料で、「諸礼式席絵図」や、明治２６年頃の「内藤町全図」等、江戸に関する絵図も残されている。

内藤家資料（４）について

内藤家資料（４）は、内藤家以外から当館へ収蔵された、内藤家関係の資料をまとめたものである。

「資料１～４」は、埼玉県在住の有賀恵子氏（辰野町伊那富出身）より寄贈されたもので、父親の故・堀内文家氏が大切にしていた古文書である。

堀内文家氏は、昭和 40 年頃に高遠中学校に勤務、高遠町誌編纂の手伝いもしており、その頃誰かからもらったものと思われるが、詳細は不明である。

高遠町図書館　２０１６．８月

長坂家資料について

長坂家資料２２３点は、平成７年の夏、東高遠の倉科氏を通して長坂家より当館へ寄贈された文書である。

長坂家の出自は、現在の山梨県長坂町辺りを領した郷士の一族であったが、戦禍を逃れて甲州を落ちのび、北沢の峠を超えて高遠の地に至り、ここに住居を構えたと伝えられている。

内藤氏が高遠に入封した後、宝永の頃から長坂家は、内藤藩に勤仕するようになったらしい。長坂家の御役は、御先手組に属する組子として藩主の参勤のお供をしたり、また、御坊主勤めとして、御料理方、御賄い方などを勤めた。

藩士は一般には、藩が用意する拝領屋敷に居住するものであるが、長坂家は、自分屋敷を持っていて、そこに住み、御城勤めをしながら、同時に板町村の村役人としての暮らしも持っていた。従って長坂家資料もまた、藩の御役に関するものと、板町村に関する地方資料の両方が混在しているところに特徴がある。

また、明治維新以後は、板町村の住民惣代として。地券の切り替えや、小金沢をめぐるむずかしい山論などの解決のために、東奔西走したらしく、これらに関する多くの記録が残っている。

私文書としては、幕末から明治四十年代にわたる日記が、ほぼ欠けることなく残されており、丹念な冠婚葬祭の記録や、火事や病気の見舞品などの記録からは、当時の人々の暮らしぶりや、助け合いの様子などが伺える。

平成７年９月
高遠町図書館

長坂凞家資料について

長坂凞家資料５２７点と、同家に残された書籍類５６５冊は、平成１４年の秋高遠町図書館に寄贈され、約６ケ月の整理期間を経て、目録が作成されたものである。

長坂凞家資料を大別すると、長坂凞氏の先祖数代に亘る人々が、内藤公に仕えた時代の高遠藩関係の諸記録と、長坂凞氏が、明治から昭和にかけての長い期間携わられた学校教育関係の諸資料、また、教員生活のかたわら、熱心に取り組まれた郷土史研究関係の諸資料、長坂家のあった旧的場村関係の資料、更には、長坂凞氏自身の趣味である短歌・俳句・書画などに分けられる。

高遠藩関係の記録の中には、高遠藩の御先手組に属して御供方を勤めたので、江戸への参勤行列帳、大坂加番の際の行列帳、更には江戸における火消し出動の際の行列帳などが残っている。また、御厩関係の勤仕の記録や、分一方関係の諸記録などがある。

教育関係の資料の中では、大正時代の長野県の児童矯正施設『海津学舎』における記録などが、珍しいものと思われる。『おやのつとめ』は、長坂凞氏の著作であるが、長坂氏はその中で、学校教育の成果は、家庭における両親の愛育の上にはじめて花開くと、家庭教育の大切さを述べている。

長坂凞氏の郷土史関係の著作には、『新撰高遠誌』『老女江嶋』「御子柴艶三郎伝」などがあり、これらの著作の元となったたくさんの調査資料が残っており、熱心で緻密な研究ぶりをうかがわせる。

書状類の中には、中村不折ほか多くの高遠出身者などからの年賀状や書状があり、与謝野寛（鉄幹）からの書状もあって、中に与謝野晶子の名刺も同封されていて、思いがけない発見であった。

書籍は、漢籍から歴史関係・医学関係・俳句・短歌・現代の小説本まで、長坂氏の趣味の広さを伺わせるものが多かった。

平成１５年２月　　高遠町図書館

『長坂凞家』目録分類

資料番号　「１－１」～「１－５３１」　……資料目録

資料番号　「２－１」～「２－５６５」　……文庫目録

仁科家資料について

仁科家資料は、令和元年７月、埼玉県さいたま市在住の宮内正勝氏が購入し伊那市へ寄贈された資料である。

仁科家は、高遠藩士であり、資料は日誌や金銭出入帳が主で、日誌には毎日の天気、出来事、野菜や食べ物にかかわる記述も多く含まれており、武士の日常生活がうかがえる資料である。

令和２年５月
伊那市高遠町図書館

藤田家資料について

この藤田家資料（２６６点）は、長い間高遠町資料館に保存されていた物であるが、平成７年春、整理を終えて当館へ収蔵された文書である。

藤田家は、元禄の末期頃から高遠藩内藤家に仕え、明和３年、給人に取り立てられ、家禄四十俵三人扶持を賜った。

明治維新まで、ほぼ五・六代に及ぶこの家は、御中小姓目付、津留改役、分一方、御武具奉行、御使番等の役職を勤め、更に藩主の内方で御子様方の世話係り等を勤めた人もあったらしい。

この資料は、残念ながら既に手を加えられたと思われる点があり、藤田家に残されていた文書は、実はもっと多数に及んでいたのではないかと推察される。

何時の日にか、残りの文書が発見されて、補遺目録を作って、藤田家の資料を完全な形にすることが出来たらと希望している。

この資料の中では、四冊の監察寮控（大目付への諸願届留）、幕末の長州征伐御供に関する諸資料などが目につく。多数の私文書の中には、諸武術の目録があり、多くの私信と、明治初期の賞状や卒業証書等もあった。

平成７年５月
高遠町図書館

馬嶋家資料について

馬嶋家資料５７０点と、同家に所蔵されていた書籍類２,３５０冊は、平成１４年の秋、高遠町図書館に寄贈され、約１ケ月の整理期間を経て、目録が作成されたものである。

馬嶋家は、眼科医を家業として、松本藩水野家に勤仕していたが、水野家の改易に伴い、享保１２年（1727）高遠藩内藤家に召し抱えられ、以後明治 4 年の廃藩まで、眼科の藩医として勤仕しながら、領民の治療にも当たっており、昭和の時代まで、眼科のみならず総ての病気に対応できる家庭医として、町民の信頼を集めた医家であった。

馬嶋家の資料は、馬嶋家に関する資料と、近い親戚関係にあった小野寺家に関する資料とに大別される。

馬嶋家関係資料には、藩医としての治療の記録などは意外に少なくて、私的な資料や、趣味などにわたる資料が多かった。

小野寺家関係の資料は、同家が高遠藩の年寄・御用人・大目付・郡代などの要職を歴任した家であるため、藩の中枢の動向を知る手掛かりとなる重要な資料が多く見出された。

同家の資料は、数年以前から高遠町図書館にその一部が所蔵されていたが、今回その残りの大部分が馬嶋家を通して寄贈されたことは、研究者にとって誠にありがたい事であった。したがって小野寺家資料は、以前から所蔵の８０点と、今回寄贈の３２８点の両資料を併せてご覧になる事をお勧めする。

医書・漢籍を始めとする多数の書籍は、馬嶋家代々の好学の精神と、趣味の広さを窺わせ、特に９００冊余に及ぶ写本の数には驚かされる。

中でも『附合詠草』と名付けられた文化年間の連歌集（１７冊)、さらには多くの謡曲本など、この地方の文化的水準の高さを窺わせる書籍も多かった

平成１５年９月

高遠町図書館

松島屋資料について

松島屋家資料１２１点は、平成１３年に他界された下寺清氏のご意志により、平成１５年夏、当館へ寄贈されました。

松島屋は、安政丙辰年（1856）に、手良村（現伊那市手良）の松島家より独立して、高遠本町に白木屋「松島屋」を開業。初代徳治郎は、高遠城の閉鎖、取り壊しに際して、建物、立木の競売に落札、多方面に売りさばきました。

明治になって、出身地「下手良」に因んで苗字を「下寺」としました。

三代目下寺清は、二代目銀三郎のはじめた金物商を継ぎ、そのかたわら文学に親しみました。

松島屋資料の高遠城郭及び立木払下げ関係の文書（明治５年～６年）１３点からは、高遠城の廃城過程が金銭面から覗える、貴重な資料です。

また、鉾持郷社営繕関係資料や、高遠町在住の豊島晃氏が創刊した「美穂」２７冊も含まれています。

平成１６年１１月
伊那市立高遠町図書館

山下家資料について

山下家資料約５６０余点は、明治以後、山下家の親戚筋に当たる高遠町東高遠の倉科家により、大切に保管されていた物であるが、平成 6 年夏、御当主倉科恒夫氏から当館へ寄贈され、当館の所蔵となった資料である。

山下家は、「高遠勤仕録」「臣下代々録」等によれば、延享２年（1745）山下友甫（佐野右衛門・祐誠）が、お坊主勤（四石二斗・二人扶持）として高遠藩内藤公に召し抱えられ、天明年代御代官に任ぜられたと記載されており、

その後

山下高武（芳右衛門・為右衛門・勝右衛門）

山下元俊（勝右衛門・芳右衛門・軽舟・西丘）

山下元常（庄作・芳右衛門）

山下元賢（虎五郎・雪山）

と、明治の廃藩に至るまで続いている家系である。

いずれも若い頃には、藩内の書役として各種の文書の作成にも係わっており、長じては、地方巧者として知られ、藩内各郷の支配を任される代官役として活躍した。したがって、残されたこれらの資料は、高遠藩の地方支配の在り方を現代へ伝える貴重な文献である。

平成６年１０月

高遠町図書館